図書館かわらばん特別号（2018 年夏）

東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態

―附属図書館「自主ゼミ等」アンケート調査によせて―

大石　学（本学教授(歴史学分野)
／前・附属図書館長）

日本近世史ゼミと筆者（『大学案内 2012』（東京学芸大学）より）

目次

東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態

―附属図書館「自主ゼミ等」アンケート調査によせて―

大石　学（本学教授(歴史学分野)／前・附属図書館長）

はじめに …… 1
「自主ゼミ」の起源 …… 1
「自主ゼミ」成立・発展の背景 …… 2
「自主ゼミ」の発展―本学学生自治会『自主ゼミパンフ』から― …… 4
「自主ゼミ」の現状―本学附属図書館アンケート調査の考察― …… 7
「自主ゼミ」の評価（１） …… 10
「自主ゼミ」の評価（２） …… 16
東京学芸大学附属図書館への期待 …… 19

付録

2018 年春学期の自主ゼミ紹介展示 …… 22
図書館かわらばん No.4「Terakoya☆コモンズ」構想 発表 …… 23
図書館キャラクターの決定 …… 24
図書館かわらばん No.9　図書館キャラクター表彰式 …… 25

東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態
―附属図書館「自主ゼミ等」アンケート調査によせて―

大石　学（本学教授(歴史学分野)／前・附属図書館長）

■はじめに

東京学芸大学の教育研究活動の特徴の１つに、いわゆる「自主ゼミ」がある。「自主ゼミ」の活動・形態は多様であり、一概に定義化しにくいが、最大公約数として、「学生が、みずからの興味・関心をもとに、主体的に参加・活動する授業外の教育研究活動」といえる。正規のカリキュラムに位置づけられていないため、学生は「自主ゼミ」に参加しても単位が与えられるわけではなく、教員も報酬はない、いわば非公式の活動である。種々の制約がないため、学生は所属・専攻を越えて他分野の「自主ゼミ」に参加したり、複数の「自主ゼミ」に参加することが可能であり、東京学芸大学固有の「教育研究文化」となっている。

しかし、「自主ゼミ」は、カリキュラム外の活動であることもあり、学生や教員の興味・関心や都合により、随時成立したり休止・消滅することも多く、現在にいたるまで、その実態はよくわかっていない。この「自主ゼミ」の実態を把握するために、東京学芸大学附属図書館は、平成 29 年（2017 年）11 月 2 日から 30 日まで約 1 か月間、メールシステムを使ったアンケート調査「『自主ゼミ』等の授業外学習に関する調査」を実施した。詳細なデータ分析については、図書館発行の「結果報告」*に譲り、ここでは、「自主ゼミ」の意義と内容について、昨年度来、本図書館が進めてきた、学生および学生コミュニティの主体的な教育研究活動を支援する「『Terakoya☆コモンズ』構想－『教え合い、学び合う』場は時代を超えて－」との関係から、分析と考察を行いたい。

（* http://library.u-gakugei.ac.jp/~staff/dmonly/notice/jishuzemi-research.pdf［学内限定］）

■「自主ゼミ」の起源

さて、「自主ゼミ」は、いつごろ始まったのか。現在、その起源がわかる資料は見つかっていない。しかし、東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史―創基九十六年史―』（昭和 44 年（1969 年）、以下『二十年史』と略す）の各学科・課程（講座・教室）の記述から、断片的ではあるが、大学発足当時の「自主ゼミ」の様子をうかがえる。

たとえば、『二十年史』の「国語教育学科」の項目によると、昭和 27 年（1952 年）に国語研究会が設立され、昭和 41 年度に東京学芸大学国語国文学会に改組されたが、この分科会が国語教育学科の「自主ゼミ」の基盤になったようである。同学会の分科会活動欄では、「上代文学分科会」が「毎週２回放課後、万葉集、古事記の講読を行なっ

ている。学生 20 名に卒業生をも交え、太田［善麿］教授の助言等により、特に万葉集では、和歌一首一首を様々の視点から研究している。尚、毎春３月には奈良方面に万葉旅行を実施し、30 数名が参加し盛況である」（p.235、なお［　］内注および下線は大石による、以下も同じ）、「中古文学分科会」が「毎週２～３回放課後、源氏物語を中心に、栄華物語等の講読をも行なっている。溝江［徳明］教授等の助言をもとに藤本［勝義］助手と学生 25 名で、特に源氏物語ゼミでは、一巻を３～４時間かけて巨視的に考察し、合せて微視的な考察を加えていき、主として文芸学的色彩が濃い。毎年２回のゼミナール合宿を行ない、他の王朝文学を集中的に講読、研究している。今春には京都方面へ２度目の源氏旅行を行なった」(p.235)と、活動の様子を記している。つづいて、中世文学分科会、国語学分科会の活動が記され、最後の「その他」の部分では、「近世文学分科会では西鶴や近松の作品を講読し、近代文学分科会では時代と国民性という観点から明治の文学を扱っている。これらは学生が自主的に行なっていて、それぞれ 10 名ほどの参加者がある」（p.235）と、授業外に学生が自主的に行い、教員が助言する研究会の活動を記している。

同じく『二十年史』の「社会科教育学科」の「歴史学」の項には、「昭和 24 年に大学が発足した当初は、各分校（世田谷、竹早、小金井、追分、大泉）に歴史研究会があって独自の活動をなしていたが、26 年 2 月になり、ようやくこれが統合して東京学芸大学史学会が誕生した」と、昭和 24 年 5 月の大学発足、26 年 2 月の分校の枠を越えた東京学芸大学史学会の成立を述べ、のち「学生を主体に月例会や卒論発表会を開き、さらに各種のゼミ活動を行なった」（p.248）と、大学発足当時から学生主体のゼミが活動している様子が記されている。

さらに『二十年史』の「書道教員養成課程」の「その他の活動・ゼミナール」の項には、「書道に関する諸問題、教育実習などに関してゼミナールをもち、成果のまとめなどを行わせている。学生の自発活動が主で、適時指導を行なっている。特に教育実習ゼミナールは毎年熱心に行なわれており、学習全般への影響も大である。また、これらのグループが各種の調査や見学、実験、小中高校生の作品蒐集、資料製作などにも発展をみせている」（p.401）と、学生主体のゼミナールの活動が記されている。

以上、『二十年史』の記述から、ニュアンスの違いはあるものの、「自主ゼミ」の特徴である、「授業外」「学生主体」などの要素が確認される。すなわち、「自主ゼミ」は、起源は不明であるものの、各学科・課程（講座・教室）それぞれの事情のもと、大学発足、キャンパス統合などをへる過程で、学生主体の活動が重視され、授業とは別に、文字通り「自主的」に成立・発展してきたといえるのである。

■「自主ゼミ」成立・発展の背景

では、これら「自主ゼミ」の成立・発展の背景に何があったのか、次にこの点をみてみたい。

東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会編集『東京学芸大学五十年史・通史編』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会発行、平成 11 年（1999 年）、以下『五十年史・通史編』と略す）によれば、「旧師範学校は、『大学』として認知されるべく、戦後すぐの時期から『教育大学・学部』をめざした努力を積み重ねていた」（p.34）と、戦中までの師範学校が、戦後「教育大学・学部」という大学化を目指し、認められたものであった。

当時学生としてキャンパスですごし、2001 年度退官した国語学教室の宮腰賢教授は、「昭和 31 年 4 月、当時世田谷分校の講堂での入学式で学長の木下一雄は『東京学芸大学はふつうの大学です』とおっしゃいました。この年から、2 年間で教員養成をする課程はなくなったのでした。先生は、『教壇に立つ者は研究者としての資質がなければならないのです』ともおっしゃいました。今にして思うと、やすあがりの教員養成ではなく、じっくり時間をかけて有為の教育者を育てるために懸命であった先生の思いの発露であったことがわかります」(東京学芸大学学務部『キャンパス通信』Vol.179、2001 年 3 月、p.8)と回顧している。当時、本学など師範学校が希望していた「一般大学」として認知されたことへの学長や学生の思いが記されている。

その後『五十年史・通史編』によれば、昭和 38 年 3 月文部省は国立学校設置法の改正により、省令で学科および課程を定められるようし、同年 11 月「教員養成大学の課程および学科目」の原案を示した。しかし、そこには「一般大学」とは異なる制度が示されていた。すなわち、文部省は、「学科」を「教育研究上の学部の内部組織」、「課程」を「学部の性格上学科を置くことが適当でない場合における教育上の学部の内部組織」と区別し、本学をはじめとする教員養成・教育学部は「課程－学科目」制を採用するとしたのである。これは、「研究」を除く「教育」だけの組織になることを意味することから、各地の教員養成大学・学部から強い反発が起きた（p.32）。

この点について、『二十年史』には、「教員養成大学の非学問性をこれほど露骨に示したものもまた比類なく、従ってあまりにも学芸大学の非学問的性格を決定付ける要因が多すぎるとして、当時の所謂各講座から批判が次々に提出された。……諸地方の大学の学芸学部や教育学部の教授会から『訴え』や問合せも本学教授会にとどけられた。本学では、教授会の委託をうけた代議員会の議決によって、昭和 38 年 12 月 28 日付本学学長の名をもって、文部省大学学術局長宛送り状を発した」（p.84）と学内の様子を記したうえで、「学科制では研究と教育のためにといっているのに、課程制では教育のためにとだけいって研究を謂わない」（p.90）、「教員養成関係の大学・学部だけをこの制度［課程制・学科目制］によることとするのは、将来大学間の格差を生む懸念が十分ある」（p.85）と、文部行政への厳しい批判も記されている。

こうした批判と同時に、学内では教育研究環境の未整備・不十分さを指摘する声が高まった。東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会編集『東京学芸大学五十年史・資料編』（東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会発行、平成 11 年（1999 年）、以下

『五十年史・資料編』と略す）では、初代学長木下一雄の言として、「いわゆる師範学校が『三段跳び』して『大学』に格上げになったわけです。即ち、師範学校は昭和 18 年中学から専門学校へ、そして 21 年『大学』となった訳で、名称は一応『大学』とはなったものの、実質的には『専門学校』であったわけですね」（p.21）と、いまだ大学として教育研究環境が未整備であったことを記している。

また、『二十年史』には、社会科の経済学の項目に「カリキュラムの整備にともない、多くの専門科目が設けられるにおよび陣容不足が感ぜられるにいたったので、昭和 35 年度より花輪俊哉が、昭和 38 年度より長谷田彰彦が世田谷分校に所属就任した。かくて専門の教育はより一層の充実をみることになったわけである」（p.260）と、カリキュラムや教員などの専門性の弱さを克服する努力が記され、英語科教育学科のドイツ語の項には、「実力養成のために、単位と無関係に［授業］を聴講する学生も増えている。このことは、専門科目の勉強に対する学生の意欲の向上をあらわすものと見てよい」（p.289）と、専門科目への学生の強い熱意を記している。

さらに、『二十年史』には、「本学カリキュラムは昭和 41 年 4 月 1 日大改訂をされ、履修基準が従来の 136 単位から 140 単位となり、各専攻、選修に傾斜をもたせるピーク方式をとり、枠外の自由科目を開設するなど専門を強化する方向に改められた」（p.295）と、こののち専門性を重視する「ピーク制」にもとづくカリキュラムへと改編したことが記されている。

このように、本学の「自主ゼミ」の成立・発展の背景には、成立期の教員養成大学・学部が、一般大学に比べ、カリキュラムや教員などの点で専門性に劣り、大学・教員はこれを厳しく認識し、改善の努力をしていた状況があった。「自主ゼミ」は、こうした状況に対する教員や学生の危機感や専門研究への意欲・熱意をもとに成立・発展したといえるのである。

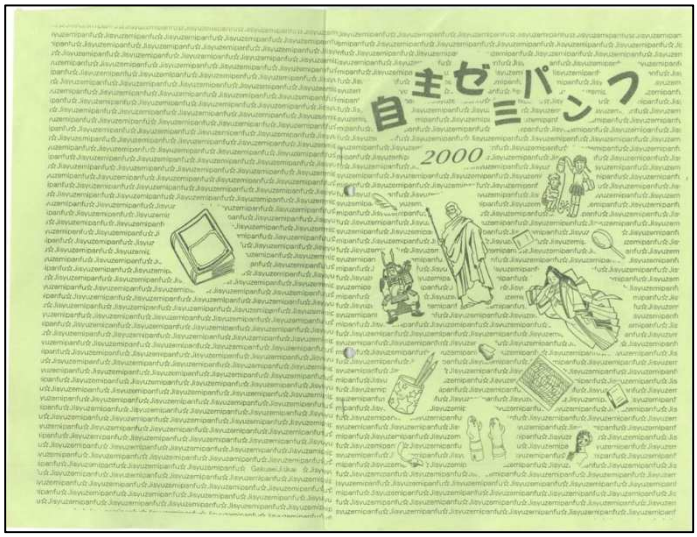
■「自主ゼミ」の発展―本学学生自治会『自主ゼミパンフ』から―

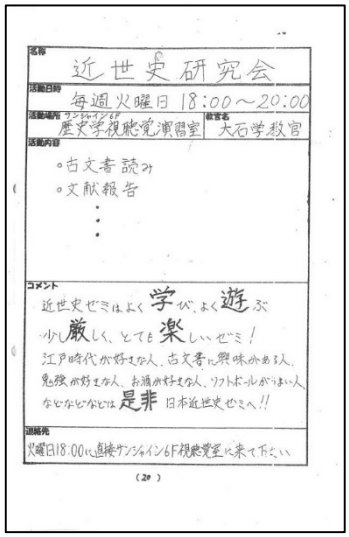
さて、以上のように、成立・発展してきた「自主ゼミ」は、その後どのように発展するのか、2000 年に始まる東京学芸大学学生自治会の調査報告である自治会発行『自主ゼミパンフ』をもとに考察を進めたい。

まず、『自主ゼミパンフ』（創刊号、2000 年 4 月）に先行するパンフ『「大学生」って何だろう 98』の「新しい仲間たちへ」と、『「大学生」って何だろう 99』の「新入生の皆さんへ」を見ておきたい。両者は同文であるが、「『大学』というところは、自分が望んでいることを自らの努力によって実現できるところです。何かやりたいことがあったら、仲間を集めてゼミナールやサークルをつくってみるのもいいでしょう。また、大学の授業内容や施設・設備などに不満があれば、その改善を求めていくこともできます」と、「自主ゼミ」設立やカリキュラム改善要求を奨める一文がある。ただ、「委員会紹介」の「ゼミ・カリ（ゼミナール・カリキュラム）委員」の項目の説明は、「カリキュラム

（授業の内容）の改善に取り組むことが大きな役割です」と、カリキュラム改善のみが説明されており、この時期、学生たちの意識のもとでは、「自主ゼミ」が正規の「カリキュラム」の後景に置かれていたことがうかがえる。

その翌年の 2000 年『自主ゼミパンフ』（創刊号）は、大学史上初めて自主ゼミ情報をまとめた歴史的成果である。この「編集後記」には、次のような文がある。「学芸大には、授業や類科に関わらず興味・関心がある事柄を教官と学生、また学生同士で研究する自主ゼミと呼ばれるグループが多くあると言われています。さらにそれに参加し自分の専攻学問を深めたい、あるいは専攻以外の分野を学びたいと思っている学生も決して少なくありません。しかし、これまで自主ゼミについて調査されたことはなく、どのようなゼミがあるかということは口コミや研究棟の掲示に頼るしかありませんでした。そこで今回、学生自治会ではそれぞれの自主ゼミ活動を紹介するパンフレットを作成しました。この冊子が自主ゼミ活動がさらに盛んになり、ひいては学芸大の学問が活発になるきっかけになれば大変嬉しく思います。しかし、この冊子で紹介している自主ゼミは全体のごく一部です。今後さらに調査をすすめ、よりよいものを作っていこうと思います。最後に、学期末の忙しい中急な依頼にも関わらず、原稿を書いてくださった各ゼミの方々に厚くお礼申し上げます」（p.26）と、「自主ゼミ」の実態把握を試みた理由を記している。バンフは、各ゼミの構成員みずからが手書きで書いた内容を、そのまま印刷したものであり、記載項目は、「名称」「活動日時」「活動場所」「教官名」「活動内容」「コメント」「連絡先」となっている。文末にあるように、把握できたのは、「全体のごく一部」であるが、学生自らが主体的に調査をおこなった貴重な成果といえる。この時期、学生が、「自主ゼミ」を「カリキュラム」とは別の価値を持つ大切な活動として認識していたことを示すものである。





『自主ゼミパンフ 2000』（創刊号）　表紙・裏表紙とゼミ紹介例

さて、この『自主ゼミパンフ』のアンケートへの回答として、哲学系の「インド哲学ゼミ（教官稲見正浩）」「ベルグソン・ゼミナール（平野具男）」の２つ、文学系の「近世文学ゼミ（黒石陽子）」「古辞書研究会（高橋忠彦・高橋久子）」「昭和文学ゼミナール（関谷一郎）」「大正文学ゼミナール（大井田義彰）」「中国文学ゼミ（佐藤正光）」「宮沢憲治ゼミ（千田洋幸）」の６つ、教育系の「大竹研自主ゼミ（大竹美登利）」「国語教育ゼミ（大熊徹・鈴木二千六）」「国語教材研究ゼミ（千田洋幸）」「古典教育研究会（鈴木二千六）「文章論ゼミ」（大熊徹）、「みんなのゼミ（奥住秀之）」の６つ、地理・歴史系の「ＡＳＫＡゼミ（考古学ゼミ）（木下正史）」「自然地理ゼミ（小泉武栄）」「社会地理ゼミナール（加賀美雅弘）」「地誌ゼミ－地域を語る－（矢ケ崎典隆）」、「近世史研究会（大石学）」「西洋古代史ゼミ（栗田伸子）」「日本近現代史ゼミ（君島和彦）」の７つ、その他「人類学ゼミナール（吉野晃）」「国語学ゼミナール（語学）（荒尾禎秀）」「ファインマンゼミ 99（大学院理科教育専攻学生２人が中心）」の３つ、計 24 の「自主ゼミ」が掲載されている。

翌 2001 年の『自主ゼミパンフ』（2001 年 3 月）の「はじめに」では、自主ゼミを定義し、意義を論じている。すなわち、「この冊子は、『自主ゼミ』と呼ばれている団体の活動を紹介したものです。自主ゼミとは、授業や類科とは別に、興味・関心がある事柄を少人数の学生と教官、または学生どうしが討論を中心に進めていく活動をしている団体のことです。学芸大では通常、学生と教官が行なっているものを自主ゼミと呼んでいますが、そうした活動をしているサークルも広い意味では自主ゼミと呼べます。授業とは別のものなので、単位が出るものでもないし、参加する義務があるものでもありません。しかし、多くの人が自主ゼミに参加しています。それは、自分の興味がある事柄を深めることができる、さらに一方的に講義を受けるのではなく討論などを通して自分で学んでいくことができる、などの魅力があるからです。また、自分の専攻とは異なる分野の自主ゼミに参加することもできます。ここまでの説明を読んで、『なんか難しそう』『自分は専門的なことを知らないから参加できないや』と思った方、そんなことはありません。もちろん、自主ゼミのやっている内容は専門的なことが多いですが、初心者でも参加できる自主ゼミも多くあります。ですから、１年生でも『このことをもっと学びたい』と思っている方は、ぜひ自主ゼミに参加して大学生活をより充実させてください。また、この冊子に書かれている自主ゼミ以外にも、学芸大には数多くの自主ゼミがあります。自分の興味がある自主ゼミ探しには、研究棟の掲示板やサークルガイドなども参考にしてください」（p.2）と、「自主ゼミ」を学芸大の活動の特徴と認識し、広く参加を呼びかけている。ここで活動が紹介されている「自主ゼミ」は、文学６、教育４、歴史・地理３、その他社会科学２、語学１、自然科学２、芸術２、その他２、サークル２、計 24 である。

同 2001 年『自治会パンフ』の「委員会紹介」の「ゼミカリ委員」の欄には、「自主ゼミとカリキュラムを主に扱う委員会です。学生みんなが思っている『より深い学びが

したい』『みんなと話し合いながら一緒に深めるような学びがしたい』といった学問に対する声を実現する委員会です」（p.12、2003 年『自治会パンフ』により補足）と、「カリキュラム」の後景にあった「自主ゼミ」が、しっかりと位置づいていることが知られる。さらに、「編集後記」には、「最後に、原稿依頼を手伝ってくださった大学の職員の方……厚くお礼申し上げます」（p.28）と、自治会のアンケート調査に大学の理解・協力があったことも認識しておきたい。

次年度 2002 年 5 月『自主ゼミパンフ』では、哲学 2 、文学 6 、教育 2 、地理・歴史 2 、その他の社会科学 2 、芸術 1 、その他 2 、計 17 団体が紹介されている。翌 2003 年『自主ゼミパンフ』は自治会に残部なし。

2004 年 5 月『自主ゼミパンフ』は、『自治会パンフ』と合冊になる。『自治会パンフ』の「委員会紹介」の「ゼミカリ委員」の項目には、「自主ゼミとカリキュラムを扱う委員会です。『より深い学びがしたい』といった学問に対する声を実現する委員会です」（p.11）とあり、自主ゼミパンフの作成を担当していたことが判明する。また、「学芸大辞典」欄の「自主ゼミ」の項目には、「これを楽しみに大学に来た人もいるだろう。学生たちが自分たちのやりたいことを自主的に運営しながら学ぶのが自主ゼミである。このパンフレットに自主ゼミ紹介コーナーがついているので是非みてみよう！」（p.25）と、「自主ゼミ」を学芸大の魅力としている。この合冊『自主ゼミパンフ』では、哲学 1 、文学 3 、教育 3 、社会科学 2 、語学 1 、その他 3 、計 13 団体の活動が紹介されている。

翌 2005 年「自主ゼミパンフ」は、『自治会パンフ』所収となり、分類せずに 13 団体が紹介されている。以後毎年、「自主ゼミパンフ」は『自治会パンフ』に所収され、2006 年「自主ゼミパンフ」は 25 団体、2007 年「自主ゼミパンフ」は 26、2008 年「自主ゼミパンフ」は 16、2009 年「自主ゼミパンフ」は 18、2010 年「自主ゼミパンフ」は 11、2011 年「自主ゼミパンフ」は 6 を紹介している。2012 年「自主ゼミパンフ」は自治体に残部なし。2013 年「自主ゼミパンフ」はゼミの名称のみ 35、2014 年「自主ゼミパンフ」も名称のみ 35 を紹介している。

この 2014 年を最後に、学生自治会は、「自主ゼミパンフ」の編集作業量の多さなどから、紹介を中止する。しかし、学生自らが「自主ゼミ」を本学の教育研究活動の特徴ととらえ、主体的に「自主ゼミ」情報を専門分野をこえて収集し、全学学生が共有することを目指して発行された『自主ゼミパンフ』は、本学にとって大きな意義をもつといえよう。

■「自主ゼミ」の現状―本学附属図書館アンケート調査の考察―

では、今日の「自主ゼミ」は、どのような状況にあるのか、冒頭で記した本学附属図書館のアンケート調査「『自主ゼミ』等の授業外学習に関する調査結果報告」をもとに考察したい。まず、アンケートの回答（回答率）は、学部生 580 人（12.5%）、大学院

生 120 人（14.5%）であり、この結果、以下の 61 のゼミの名称が明らかになった（ただし、これは 123 件の回答から重複するものを除いた数であり、教員名によるゼミ名の回答と重複がある可能性がある。）。

【アンケートにみるゼミ名一覧】（五十音順）

ASKA ゼミ	イスラームゼミ	MKG ゼミ
演劇ゼミ	音楽教育実践ゼミ	音楽教材研究ゼミ
環境教育リーダー養成講座	技術ゼミ	教育自主ゼミ
教育実践ゼミ	近世初期文芸ゼミ	近世文学ゼミ
近世読み物研究ゼミ	芸術学ゼミ	源氏ゼミ
国語教育ゼミ	国語教材研究ゼミナール	古辞書ゼミ
ことば実践ゼミ	ことばの教育雑誌ゼミ	雑誌製作ゼミ
児童文学ゼミ	社会科教育院生ゼミ	社会教育ゼミ
宗教社会学ゼミ	昭和文学	書学ゼミ
吹奏楽研究ゼミ	青年文化ゼミ	西洋近現代史ゼミ
西洋古代史ゼミ	造形芸術学ゼミ	大正文学ゼミ
中国文学ゼミ	中国古典文学ゼミ	中世文芸ゼミ
都市地理ゼミ	日本近現代史ゼミ	日本近世史
日本語学ゼミ	日本古代史ゼミ	日本中世史ゼミ
年少者日本語教育ゼミ	博物館学ゼミ	批評・評論ゼミ
被抑圧者の教育学読書会	文化財科学ゼミ	文化地理ゼミ
文章論ゼミ	法学	萬葉ゼミ
水俣ゼミ	明治文学ゼミナール	理論×実践研究会

（以下、教員名によるゼミ名の回答）

荒井ゼミ	岩田ゼミ	小林ゼミ
櫻井ゼミ	清野ゼミ	馬場ゼミ
渡辺ゼミ		

以上 61 件

以下、アンケートの内容についてみると、まず、「学生が一般的に活動するコミュニティ」として、自主ゼミは、①アルバイト（458 人）、②学部・学科の友人の集まり（389）、

③小中高時代の友人の集まり（264）につづき４位（258）となっている。また、「学習活動をおこなうコミュニティ」に限定すると、自主ゼミは１位（245）であり、②学部・学科の友人の集まり（174）を大きく引き離している。そして、自主ゼミを含む「これらコミュニティがおこなう学習活動の第１の目的」としては、①自分たちの知識・技術の向上（169）、②学習それ自体（97）、③コミュニティの中心的活動（70）、と興味・関心にもとづくものであり、④授業課題・試験対策（60）、⑤就職・進学（21）などの実用性を大きく上回っている。

「自主ゼミ」の頻度は、①週１回程度（212）、②週２回以上（13）、③月１回程度（8）と、週１回が圧倒的であり、参加人数は、①11～20 人（97）、②1～10 人（92）、③21～30 人（48）と、20 人以下が多い。活動内容は、①議論（151）、②文献講読（135）、③研究発表（129）と、学生中心であり、活動曜日は、①火曜日（77）、②月曜日（49）、③金曜日（42）、開始時刻は、①18 時台（160）が圧倒的で、②16 時台（19）、③午前中（11）となっている。参加の目的としては、①自分たちの知識・技能の向上のため（95）、②学習それ自体のため（72）、③卒業論文のため（35）と、学問・研究が主となっている。教員については、①いつも参加する（147）、②よく参加する（48）、③たまに参加する（14）と、積極的な参加がみられ、自主ゼミでの教員の役割は、①学術的な知識の伝達（174）、②文章・発表への指導（118）、③調査方法の指導（88）と、専門分野の教育研究が中心となっている。

「自主ゼミ」を含む学生コミュニティと本学附属図書館の関係については、図書館を①やや利用したい（271）、②かなり利用したい（183）、③非常に利用したい（150）と、希望はあるものの全体からすると少ない。学生コミュニティが図書館利用に少し消極的な理由としては、「自主ゼミ」が教室中心に行われていること、図書館の環境がまだ十分でないこと、によると思われる。他方、図書館に準備してほしいものとして、①ホワイトボード（436）、②電源（429）、③移動可能の仕切り（270）、などがあげられており、「自主ゼミ」でも利用したいという潜在的な希望が強いことを示している。図書館に欲しい空間としては、①１人用の部屋（364）、②3～12 人用の部屋（280）、③１人用の座席（218）、となっており、個人スペースとともに、ここでも「自主ゼミ」を含むコミュニティ活動の環境整備が要望されている。

その他、記述式の意見欄には、a「ラーニングコモンズのような施設の拡充」、b「自主ゼミができる場所を提供してほしい」、c「グループで自由に使えるスペースを増やしてほしい」、d「集まってミーティングを行えるスペースを増やしてほしい」、e「研究発表の場がほしい」などのハード面に関する希望と、f「どの先生がどのようなゼミを開いているか情報がほしい」、g「他学科のゼミ（自主ゼミを含む）の情報が欲しい。キャンパス・アジアのような専攻に関係なく参加できるものを紹介してほしい」、h「自主ゼミの一覧がほしい」「自主ゼミの情報が集まる場所（ネットでも図書館でも）が欲しい」、i「授業時間内でも自主ゼミができるようにしたい」、j「他学科の教授の専門

関係の情報やアドバイザーがほしい」。k「ゼミの活動状況に関する調査をしてほしい」など、ゼミ情報や教員情報などソフト面に関する希望もみられた［以上、記述式の文面については文意を損なわない範囲で一部修正した。以下も同じ］。これらの希望や意見をみると、今日、附属図書館のハード・ソフト両面の環境整備は、学生の主体的な学習・研究を発展させるうえで、不可避の課題となっていることがわかる。

■「自主ゼミ」の評価（１）

以上、「自主ゼミ」の現状を見てきたが、では「自主ゼミ」は、大学および関係者などからいかなる評価を受けているのか、この点について検討していきたい。

まず、本学の大学広報誌から見てみたい。**(1) 東京学芸大学学務部編『キャンパス通信』**には、教員や学生・院生たちの「自主ゼミ」に関する記事が見られる。①1999年の Vol.172 の「退官の言葉」には、生活科学研究室の深谷和子教授が、「自主ゼミを支えにして」と題して、「私のささやかな自負は、25 年間、毎週火曜日の夜に、万難を排して『自主ゼミ』を開講し、それを続けてきたことです。学年・性別・学科を問わず、また社会人の参加も歓迎するオープンな風土を持ったゼミだったと思います。多様な人々と毎年多くの本を読み、討議をしてきました。そこからおかげさまで沢山の素晴らしい人材が巣立っていきました」（p.10)と、「自主ゼミ」が教員にとっても貴重であったと述べている。②2004 年の Vol.189 には、国語教育専攻の修士課程修了者が「私の大学生活というのは、大学側の提供する授業にも、学生たちの自主的な活動としての部活動やサークルにもなく、その中間形態たる自主ゼミにだけ存在していたといっても過言ではない。学芸大の自主ゼミというのは不思議な空間である。その構成員は研究室の構成員と一部重なっているが、それとは異なる人々も多数参加している。……自主ゼミが大学の授業と何が違うのかと問われれば、自主ゼミには授業と異なり、多様な人々の社交の空間があるということに尽きるだろう。自主ゼミには実にたくさんの人々がやってくる。大学の教官を始めとして、現職の教師、博士課程の院生や修士課程の院生、そして四年から一年までの学部生。彼らの年齢は全くバラバラであり、経験や知識の差も甚だしい。しかしそこではそのような差異は一切問われない。全員が同じ土俵に立ち、一つのテクストをめぐって、意見を戦わせる」（p.6）と、「自主ゼミ」を多彩で平等な「不思議な空間」と高く評価している。

(2) 東京学芸大学学務部編『ＴＧＵ＜Tokyo Gakugei Univ.キャンパス通信＞』は、2006 年第 196 号から『キャンパス通信』を引き継いだ本学広報誌であるが、ここにも「自主ゼミ」に関する記述がある。①2007 年『ＴＧＵ』第 201 号には、教養系欧米研究の学生が、「欧米研究の授業でパリの町並みを研究するうちに、都市や街は技術だけではなく、芸術や社会学などいろいろなことが組み合わさって出来ているのだと気付きました。そういったものをもっと勉強したいと先生に相談したところ、自主ゼミを勧められ、実際に自主ゼミで地域冊子の制作などを通じて町づくりを研究しました」(p.

5）と、授業の発展形態として「自主ゼミ」を利用したことを記している。

②2008 年『ＴＧＵ』第 202 号の「Viva! Visual Variety Gakugei」欄には、「加藤富美子（本学音楽・演劇講座教授）研究室の自主ゼミ『音楽劇団 Kami 屋』によるオペラ『口は口ボットの口』が 2007 年 1 月 8 日に本学の芸術館で行われました。『プロジェクト学習科目の発展として生まれた自主ゼミであることから、学内のたくさんの方々に暖かなご支援をいただき、準備を進めることができました。大変嬉しく思っております』と加藤先生。当日は多くの親子連れが訪れ、公演を楽しんでました」（p.26）と、ここでも授業から発展した「自主ゼミ」を紹介している。③2008 年『ＴＧＵ』第 203 号の「Gakugei Life」欄では、日本語教育学科のアルゼンチンからの留学生が、「本当に様々なことに挑戦してきた。そば屋のお手伝いから、ボランティア、自主ゼミへの参加、書道、茶道など自分が興味を持った分野にたくさん挑戦した」（p. 7）と述べている。④2009 年『ＴＧＵ』第 207 号の「Viva! Visual Variety Gakugei」欄では、前記②に続いて「加藤富美子（本学音楽・演劇講座教授）研究室の自主ゼミ『劇団おとみっく』によるオペラ『魔法の笛』が 2009 年 1 月 29 日に本学の芸術館で行われました。今回、演出・指導にオペラシアターこんにゃく座の大石哲史氏をむかえ、ユニークな脚本で上演されました」（p.25）と「自主ゼミ」の公演を紹介している。

⑤2010 年『ＴＧＵ』第 210 号の「キャンパスライフ委員会」欄の教養系Ｋ類日本研究３年生は、「高校三年生の時に学芸大学の自主ゼミのことを知りました。現在、私は国語教育教室の源氏ゼミに所属し、河添房江先生のご指導のもとで、『源氏物語』を勉強し、この春よりはゼミ長も務めています」（p. 22）と、教養系の学生が教育系の「自主ゼミ」に参加し、リーダーを務めていることを記している。⑥同じく 2010 年『ＴＧＵ』第 210 号の「Viva! Visual Variety Gakugei」
欄には、②④につづいて「昨年の十二月十八日～十九日、東京学芸大学芸術館ホールにて、オペラ『森は生きている』が公演されました。このオペラは、加藤富美子先生率いる自主ゼミ『劇団おとみっく』によるもので、指導・演出にオペラシアターこんにゃく座の大石哲史先生をむかえ、音楽の学生の他に美術の学生にも協力していただきました」（p.28）と、「自主ゼミ」のオペラ公演を紹介している。

⑦2011 年『ＴＧＵ』第 216 号の「学生インタビュー」欄では、Ａ類英語選修の学生が「英語科にはゼミというものが元々なくて、４年生になって卒論を書くために研究室に所属します。それまでは自主ゼミみたいのを受けています」（p. 18）と、卒論までの期間の「自主ゼミ」活動を述べている。⑧2013 年理科の卒業生は「研究室は理科・地学・気象研に、部活動は体育会・硬式テニス部に所属していました。当時気象研は、毎日の気象観測や自主ゼミ、研究発表会などが学生主導で活発に行われていました」（『ＴＧＵ』第 225 号 p. 7）と、理科研究室の「自主ゼミ」の活動を述べている。⑨2014 年芸術・スポーツ科学系の加藤富美子教授は退職の言葉のなかで、先の②④⑥の活動をあげ、「学芸大学での私を彩った最大の活動として、自主ゼミでの日本語オペラの上演を

あげることができます」（『ＴＧＵ』第 226 号、p.9）と回顧している。⑩2014 年国語科学生は教育実習報告で「指導案を書く練習をやっておくべきだと思います。私は国語科の自主ゼミで、４月末自分なりに１本指導案を書きました。授業では指導案を書く機会が少ないので、自主的に練習すると良いと思います」と述べ、他の学生は「私は国語教育を専門に研究しています。自主ゼミなどで他の学生と意見交換をしてより良い授業を考えています」（『ＴＧＵ』第 232 号 p.3）と、教育実習や授業に関する「自主ゼミ」の役割を記している。⑪同じく 2014 年学芸カフェ講座報告では、生活科学分野の馬場幸子教授が、「この講座では、初めに私が児童虐待問題について話をし、馬場自主ゼミの学生たちが、昨年の小金井祭で行ったオレンジリボン運動を中心にゼミでの活動を紹介しました」（『ＴＧＵ』第 226 号 p.20）と、大学の講座や学園祭で「自主ゼミ」グループの活動成果が報告された。⑫2018 年Ａ類国語選修の学生は「日本語学系の自主ゼミで先輩方の研究を見ている中で、言葉違いのストラテジーで相手との距離を調節するポライトネスに興味を持ったので、卒論ではポライトネス理論を用いてほめ言葉を分析しました」（『ＴＧＵ』第 239 号 p.2）など、現役生、卒業生、留学生、教員など、さまざまな人々が、「自主ゼミ」に参加し、その意義を評価している。

さらに、大学発行の **(3)『大学案内』**でも、毎年のように「自主ゼミ」が紹介されている。①2012 年度版『大学案内』のａ「東京学芸大学の特色」には、私が関係する「自主ゼミ」である「日本近世史ゼミ」を取材し（表紙写真参照）、「学芸大学には学生が自主的に集まって勉強をする『自主ゼミ』の伝統があります。そこには先生も参加して、学生たちと一緒に毎週議論をしています。学芸大にたくさんあるゼミの中で、大石先生のところのゼミは『日本近世史ゼミ』といいます。参加者は大学院生や留学生も含めて 20～30 人くらいで、皆で江戸時代の古文書を読んで研究を進めています。年に何回か先生と一緒に合宿もします。このように先生と身近に接しながら、直接教えを受け、共同研究のおもしろさや厳しさを経験する学生が学芸大学にはたくさんいます」（p.12）と紹介している。また、ｂ「Ａ類国語選修の特色」では、教員が「各教員は、１年生から参加できる自主ゼミを担当しています」（p.22）と紹介し、学生が「国語科最大の特徴は、学生による自主ゼミが盛んなことです。１年生から参加することができ、近代文学・古典文学・日本語学・中国古典文学・国語科教育の５つの分野に分かれています。ゼミで多くの仲間と議論を重ね、様々な意見に出会うことは、自分の学びによりよい影響を与えてくれます。同じ志を持った仲間や優しく指導して下さる先生方とともに、有意義な時間を過ごすことができます」（p.22）と解説している。ｃ「Ａ類社会選修」では、学生が「Ａ類社会選修では、小学校等の教員に必要なスキルを学べると同時に高い専門性を身に付けることができます。それは、７つの（社会の）分野で数多くの自主ゼミが開かれ、自分の興味のある分野を専門的に学べる環境が整っているからです。私が所属する哲学の自主ゼミでは、友人や先生と哲学の古典を読んだり、合宿で先輩方や他学科の学生と議論したりしています。教育を学べ、自分の専門分野を学べるこの選修は

とても魅力的です」（p.23）、ｄ「Ｂ類国語専攻」では、「また国語専攻では、一年生から自主ゼミに入ることができます。ゼミの種類は多く、教育系の学問に限らず自分の興味に沿ってやりたいことをとことん学べます」（p.38）、ｅ「Ｂ類社会専攻」でも、学生が「私は１年生から地理学の自主ゼミに参加し、先生や上級生、卒業生や社会人の方をまじえたフィールドワークや勉強会を通して、知識が広がりました」（p.39）、ｆ「Ｋ類アジア研究」では、教員が「同じ分野やテーマに関心を持つ学生同士が組織する『自主ゼミ』を通し、授業だけでは経験できない知的達成感を十二分に味わうことができる」（p.56）と、それぞれの「自主ゼミ」を紹介し、高く評価している。

②2013 年度版『大学案内』では、ａ「Ａ類国語選修」で教員が「自主ゼミも活発で、学びたい人たちが自分たちで集い、夜を徹して語り合います。私たち教員もそんな学生たちを手弁当で応援しています」(p.18)、ｂ「Ａ類社会選修」では、学生が「実際に専門分野へ分かれての学習は二年次からですが、一年次から各分野で開かれている自主ゼミに参加することも可能です」（p.19）、ｃ「Ａ類学校教育」では、学生が「自主ゼミで文献を読み学びを深めたり、学校ボランティアや特別な取り組みのある学校に行って学校事情を学んだりするなど、自分次第で学びの方法がいくらでも広がる、柔軟性に富む選修です」（p.27）、ｄ「Ｋ類アジア研究」では、学生が「自主ゼミでは先生方、学科の仲間達と日々積極的な意見交換をして視野を広め、考えを深めていくことができます」と、「自主ゼミ」の意義を記している。

③2014 年度版『大学案内』では、ａ「Ａ類国語選修」の学生が「なかでも興味のある分野は、１年生から参加できる自主ゼミの国語教育ゼミで学んでいます。小学校国語教科書の教材を、原典や表現など様々な観点から研究しています」（p.20）、ｂ「Ｂ類国語専攻」の学生は「国語科では１年から入れる『自主ゼミ』が活発に行われています。こちらは４年間かけて自分の興味のある分野を学ぶことができ、その中で自分のやりたい研究分野を見定めることもできます。現在、私は言語学の研究をしていますが、入学当初は自分が何を専門にしたいのかはっきりしていませんでした。そのため、在学中に色々な分野に触れようと『文章論ゼミ』と『源氏物語ゼミ』という全く異なる二つの自主ゼミに所属しました。一見、後者は現在の専門と無関係のようですが、実はそこで学んだ考え方が言語学を専攻するきっかけになっています。古典作品に登場する語のイメージは現在の感覚で捉えている同語のそれとは異なるため、当時その語がどんな語と一緒に使われていたか、どんな場面で使われていたか等を分析していきます」（p.36）、ｃ「Ｋ類アジア研究」の学生は、「私はイスラームに関心を持って、自主ゼミを通じて楽しく勉強しています」「アジア研究は、学生自らが主体となって学ぶ場です。日々の授業や自主ゼミはもちろんのこと、学生の半数は留学制度を利用し、高度な専門性や語学力、経験を積んでいます」（p.54）、ｄ「Ｆ類文化財科学」の学生は、「これら［文化財に即した授業］は主に２年次の授業ですが、自主ゼミや各研究室でも授業で取り上げる作業を行っています。１年生からでも、やる気次第でこのような作業に参加することが可能

です」「私は１年次から文化財保存科学についての自主ゼミに参加しています。学年に関係なく、様々な観点から文化財の保存について触れることができ、また実際に保存処理を行う機会も恵まれてきました。そのような環境の中で、私は水害被災した紙資料の保存処理法に興味を持ちました。現在は、被災現場という制約ある環境の中で、できる限り簡便な方法で紙資料の保存利用を行うためにはどうすればよいのかを研究しています」（p.58）など、「自主ゼミ」の重要性を記している。

④2015 年度版『大学案内』では、ａ「Ａ類国語選修」の学生が、「授業外では、より関心のある分野について、１年次から参加できる自主ゼミで学びを深めます。先生方のあたたかい指導のもと、仲間と議論を交わしながら研究を深めることができます。学部の学生だけでなく、留学生や院生・卒業生が参加される自主ゼミもあり、個人の学びでは気づけない視点や、考えの深まりを得られる貴重な場となっています」（p.24）、ｂ「Ａ類音楽選修」の学生は「学生が主体的に音楽活動を行う自主ゼミもあり、小学校への訪問演奏、図書館コンサート、ドイツ研修旅行などを行い多くのことを学びました」（p.28）、ｃ「Ｂ類国語専攻」の学生は「１年次から自分の好みの『自主ゼミ』で専門性の高い勉強ができます。私は『日本語学ゼミ』と『万葉ゼミ』に所属している」（p.40）と、「自主ゼミ」の効用が説かれている。

⑤2016 年度版『大学案内』では、ａ「Ａ類国語選修」の欄で、教員は「国語教育ゼミ、文章論ゼミ、国語教材研究ゼミ、ことば実践研究会、年少者日本語教育ゼミ、第二言語習得研究ゼミ、構造ゼミ、理論×実践ゼミなどの自主ゼミ（課外ゼミ）や、学芸国語国文学会の活動が盛んなので、授業以外でも主体的に研究や教育の活動に取り組むことが可能です」、学生も「授業外でも１年次から参加できる自主ゼミで、自分の関心ある分野の勉強を深めることができます」（p.22）と記している。また、ｂ「Ｂ類国語専攻」の欄で、教員は、「日本語ゼミ、中国文学ゼミ、古辞書研究会、万葉ゼミ、源氏ゼミ、中世文芸ゼミ、近世初期文芸ゼミ、近世文学ゼミ、明治文学ゼミ、大正文学ゼミ、昭和文学ゼミなどの自主ゼミ（課外ゼミ）や、学芸国語国文学会の活動が盛んなので、授業以外でも主体的に研究や教育の活動に取り組むことが可能です」、学生も「１年次から自主ゼミに所属することができ、特定の分野について専門性の高い勉強ができます」（p.31）と記している。さらに、ｃ「Ｂ類英語専攻」の学生は「私がＢ類英語専攻に入って得たもの、それは……英語集中訓練の自主ゼミＩＴＣで身につけた実践的な英語力」(p.47)と記している。

⑥2017 年度版『大学案内』では、ａ大学全体の説明の「教育学部に進もう」の欄で、「東京学芸大学には自主ゼミという伝統があります。学生が自分たちで勉強会を開き、先生がそこに参加するのです。教育学部の教員は、学生に対する指導に熱心です」（p.8）と、大学の伝統として位置づけ、ｂ「Ａ類国語選修」の学生は、「１年次から参加できる自主ゼミは、専門的知識を身につけると同時に貴重なアウトプットの場となります。こうした大学院生をも含めた全学年、そして先生方との交流を通した学びの機会の多様さ

は本学国語選修の特権ともいえるでしょう」(p.16)、c「B類国語専攻」の学生も、「1年次から自主ゼミに所属することができます。自主ゼミは演習よりもさらに細かい分野に分かれていて、学部や大学院の先輩方と一緒に、より専門性の高い学習を行います。これらの活動を通し、国語の専門家として将来教壇に立つための基盤が形成されていくと感じています」(p.32)と、意義づけている。

⑦2018年度版『大学案内』では、a大学の説明「教育学部に進もう」で前年同様の記述があり、b「A類国語選修」の学生は、「授業の他に1年次から参加できる自主ゼミがあります。学年を問わず、志を持つ者が集まり議論することで、より深い学びに繋がっていきます。皆で意見を出し合い、話し合うことで1人では気づかなかったことに気づくことができる。あの感動は何にも代えがたいものです。国語選修で培った基礎的な知識や専門的な技術や実践力は自身の力になり、教育実習での授業に確実に活かされます」(p.18)、c「B類国語専攻」の学生も、「国語科は1年次から自主ゼミに参加することができる学科の1つです。現在、自主ゼミは10種類以上存在し、それぞれ興味のある分野に関して学部及び大学院生の先輩方と一緒に専門性の高い学習を行うことができます。これらの活動を通して、国語の専門家として将来教壇に立つための基盤が形成されていくと感じています」(p.34)と記し、c「B類英語専攻」の学生は、「授業外でも、英語に完全に浸かることで日本にいながら海外体験を味わえる学生主体のゼミ、ＩＴＣなど、学んだ理論を実践に移し経験を多く積むことができます」と、多様かつ学生主体という特徴を記している。

⑷ その他、東京学芸大学全国同窓会機関誌『辟雍［へきよう］』(No.5、2008年)の「ヘキヨウネット」欄には、連合大学院博士講座修了者が「北海道への就職と暮らし」と題して次の文章を記している。「高校時代はあまり勉強していなかったせいか、大学で学ぶことはすべて新鮮でした。当時の障害児教育学科では、いろいろな研究室で『自主ゼミ』が開かれていました。大脳生理学、ドイツの障害児教育史、解剖学、運動生理学など、各分野の英語やドイツ語の文献を、学部から大学院生まで集って一緒に訳しながら読み進めていきます。私は1、2年の頃、大脳生理学の研究室(堅田明義先生)、ドイツの障害児教育史(松矢勝宏先生)の自主ゼミにそれぞれ週に一度参加していました。最初は専門用語ばかりで数行を理解するのに何時間もかかりましたが、単語帳を作りながら、徐々に覚えていきました。この自主ゼミは卒論・大学院生が中心でしたが、先生も途中から参加して、ゼミ後のおしゃべりや夕食も大きな楽しみでした。こうした自主ゼミから、多くの研究者が巣立っていきました」(p.16)と、「自主ゼミ」が教育研究の基盤であると意義づけている。

以上、『キャンパス通信』、『ＴＧＵ』、『大学案内』など大学関係の刊行物から、「自主ゼミ」が、大学および関係者などが広くその価値・意義を認める活動であり、同時に学生・留学生・大学院生・卒業生・教員などの参加者も、その価値と意義を共有していたことが確認された。たしかに、「自主ゼミ」は「本学固有の文化・伝統」として位置づ

いているのである。

■「自主ゼミ」の評価（２）

次に、私自身、本学学生・大学院生時代、そして非常勤教員、専任教員の時代を通じて所属してきた歴史学教室・研究室の「自主ゼミ」について見てみたい。

現在、歴史学研究室・東京学芸大学史学会が保存する最古の『史学会報』（1956 年）には、「研究室近況」として「学問の方面においても、以前とは異って幾つかのグループが作られ、卒論演習や、ゼミナール活動を活発化して来ています」と、当時のゼミ活動の活発な様子が記されている。

また、東京学芸大学史学会編集・発行『史海』第 6 号（1959 年）の「研究室便り」の欄には、「碁のほうが自然下火になると遊んでばかりいられないと日本史、西洋史を問ずゼミナールが乱立した。そのおもだったものをひろってみると、日本史では萩原［竜夫］先生を中心として『中世的世界の形成』（石母田正著）ゼミ、学生だけの『武州文書』ゼミ、西洋史では小林［幸輔］先生を中心として『ドイツ文学史』（Gルカーチ）ゼミ、高山［一彦］先生を中心とした『フランス革命史』ゼミ等がある」（p.68）と、学生だけのゼミを含め多くのゼミが記されている。

『史海』第 7 号（1960 年）の「研究室便り」には、「小金井の時は熱心にゼミに参加していた人も世田ケ谷分校へ来ると、もうゼミなどで必要でないと思うのか、色々と雑務に追われることが多くなるのか、あるいは又卒論一本に打込むのか、ゼミナールを行う者が大分減る傾向にあるようです。それでも今年開かれたゼミは比較的多く、日本史では外村［久江］先生を中心とした『吾妻鏡講読』、萩原先生を中心の『近世史ゼミ』、学生だけの『自由党史研究』、更に佐々木先輩を中心の『明治維新と地主制』、西洋史は小林先生の『ドイツ史』、半田［元夫］先生を中心に小金井と合同の『イギリス文化史』等々のゼミが持たれました」（p.56）と、教員指導のゼミ、卒業生主導のゼミ、学生のみのゼミなど、多様なゼミが活発に活動している様子が記されている。

『史海』第 8 号（1961 年）の「研究室便り」には、「本年も新学期早々、数々のゼミナールが活動を開始した。併し、安保闘争、教員資格試験、道徳講座設置に関する学内闘争等々に阻まれて、二、三のゼミナールを除いて龍頭蛇尾に終った感がしないでもない。日本史関係では、千々和［実］教官を中心とした『仏教史』・『近代史』・『農業史』、結城［陸郎］教官を中心とした『文化史』がある。西洋史関係では、高山教官を中心とした『フランス革命史』、小林教官を中心とした世田谷、小金井両分校の学生による『ドイツ史』である。ゼミ活動で特筆すべきものとして『後期封建制度研究会』がある。これは教育大大学院生森安彦氏の指導の下に、史学会会員有志が中心となり、学外で徳川封建体制－徳川知行制－の研究を行うものである。今後共、各ゼミナール一層の努力を期待したい」（p.34）と、年度初めに多くのゼミが発足しつつも、年度途中で活動を停止すること、他方、教員主導のほか、他大学の大学院生が主導し学外で活動するゼミが

あったことも記されている。

『史海』第 9 号（1962 年）の「研究室便り」には、「本年も四月から数多くのゼミナールが発足したが（九ゼミナール）、夏休みのころから次第に解体を始め、最後までもったゼミナールは二つ位であった。個人が自由に自分のテーマを研究しようとしてこのような結果になったのだろうからいいが、しかし、あまり早くから視野をせまくしないで、共通のものを何かしら多勢で追究していくという態度も失わないようにしたい」(p.34)と、ゼミの意義と不安定さを指摘している。

『東京学芸大学史学会会報』（東京学芸大学史学会発行、復刊第Ⅰ号、1964 年、以下『会報』と略す）の「学生会員ゼミナール」の欄には、「中世史ゼミナール」の「萩原先生が顧問になっています」と「近代史ゼミナール」の二つが記されている。

『史海』第 12 号（1965 年）には、「史学会のゼミ、年度始めには数多く開かれたが、段々沈滞してくる。それでも、近世史の小金井市史編さんのためのゼミや、考古学ゼミ、西洋史のフランス革命ゼミ、英国文化史ゼミなどが活発に行なわれている」（pp.48～49）と、ゼミの発生・沈滞化現象とともに、地元自治体史と連携するゼミ活動も紹介している。

『会報』第 12 号（1969 年）の「ゼミ紹介」では、「次にかかげるようなゼミナール・研究会が自主的に開かれており、自由にいつからでも、誰でもが参加できるものばかりである」（p.7）とし、「平安遺文、指導・阿部猛助教授、毎週月曜日五時」、「続日本紀研究会、指導（阿部猛助教授）・院生Ａ氏［固有名詞はアルファベット化した、以下も同じ］、火曜日三時」、「中世史研究会、リーダー四年Ｂ氏、水曜日一時」、「近世古文書ゼミ、リーダー四年Ｃ氏、火曜日一時」、「宗教改革ゼミ、指導半田元夫助教授、火曜日四時四十分」、「ルネッサンスゼミ、指導増田重光助教授、火曜日三時」と、教員は「指導」、院生や学生は「リーダー」と書き分けている。教員が皆助教授である点や授業時間内に活動している点など不明な部分もあるが、学生の「自主的」かつ多様なゼミの実態がうかがえる。

『史海』第 17・18 合併号（1970 年）の「編集後記」には、「最近、学内では自主ゼミが盛行しており、また、卒業生の間で、『歴史教育研究会』が発足し、月一回の例会がもたれています。そのようなゼミ・研究会の中からやがて水準の高い成果が生れるものと意を強くしております」（p.90）と、「自主ゼミ」の活性化が記されている。なお、ここでの「自主ゼミ」の表記が、現在収集した全学の資料における初見であり、以後歴史学教室・研究室の関係資料において「自主ゼミ」の表現が広く用いられるようになる。

『史海』第 23・24 合併号（1977 年）の「ゼミ紹介」には、日本中世史の分野で、「中世史研究会」が「本会は、毎週水曜日の午後になると集う自主的研究会です」、「中世史ゼミ」が「一昨年の六月、私たちは新任の佐藤和彦先生を囲んで、新しいゼミを創りました。……ゼミでは、学年の差別もなく討議も活発で、欠席も少なく皆がんばっています」（p.69）と、複数のゼミの活発な活動が報告されている。

『会報』第 23 号（1980 年）は、特集「史学会学生部会再建によせて」のもと、「自主ゼミ」に関するさまざまな意見を載せている。修了生Ａは、「学大の歴史関係の先生方による研究指導体制、ならびにそれを支える環境は他大学に比べたいへん恵まれているのであり、私自身も他の大学からここに移ったのであるが、その点を強く感じたものであった。活発に活動している自主ゼミを一瞥すれば必ず先生方を中心に組織づけられていることからも伺うことができる。しかし、講演会や自主ゼミなどで先生方の指導を仰ぐことも重要だと思われるが、それだけの理由でゼミが運営されているとしたらいささか残念なような気がする。学生時代のゼミは単に既存するゼミに参加し学んでいくだけではなく、共通の問題意識をもつ仲間が勉強会などを自然発生的につくりあげていく、そういった雰囲気が重要だと思われる」（p.3）と、学生の主体性強化を提起し、また学生Ｂは、「『教育系』の名の下になされる桎梏（劣悪な研究条件）下で、ひとり史学科生は主体的に自らの学ぶ場を構築してきた。ひしめきあって割拠する 11 ゼミとプラスαの研究会がその象徴である。いずれも自主ゼミだが、教官方の献身的協力に支えられている」（p.7）と、「自主ゼミ」の実態と意義を記している。

『史海』第 29 号（1982 年）の「ゼミ紹介」では、「民俗資料ゼミ」の「教官はおりませんでしたが、本ゼミのＯＢのＫ氏とＢ氏などに指導していただきながら」(p.92)、「歴史学合同研究会」の「日・東・西や時代別の枠組みを越えて、歴史学の在り方や歴史における現代の意味を考えている自主ゼミで、月に一度ずつ報告会を持っています。学生・院生・卒業生によるサロン風の勉強会ですので、興味あるテーマの際はぜひ参加してください」（pp.96～97）と、ともに教員ぬきの「自主ゼミ」の活動が記されている。

『会報』第 76 号（2000 年）には、それまでの「ゼミ紹介」欄の名称が「自主ゼミ紹介・活動報告」と変更された。『会報』第 81 号（2002 年）では、大学院生が、「我が大学では日常的に各自主ゼミにおいて活発な議論を行っているが、自分の問題意識を設定する上で、これを利用しない手はあるまい。また、多くの学生が教員を目指しているという現状を考えても、専門性を身に付けなければいけないという点でゼミは不可欠であるように私には思える。なぜならば『教育者』は自分のフィールドにおいては『専門家』たるべきであり、『研究者』たるべきであると信ずるからである」「今回の報告を通して……自主ゼミという素晴らしい伝統の存在を改めて認識するに至った。なんとかこれを我々の後輩達に伝え、皆の学びの場としていきたい」(p.8)と、「自主ゼミ」を本学の文化・伝統として評価している。

日本近世史ゼミ風景（2013 年 2 月）

以上のように、「自主ゼミ」は、歴史学教室・研究室においても、修了生、院生、学生などが、世代や年代をこえて本学の文化・伝統として高く評価しているのである。

■東京学芸大学附属図書館への期待

さて、教員養成大学・学部の教育研究とも深くかかわる学習指導要領は、平成 30 年度改訂に向けて、作業が進められてきた。この次期・新学習指導要領は、その特徴として、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を標榜している。これは、「個別の知識や技能（何を知っているか、何ができるか）」に加えて、「思考力・判断力・表現力等（知っていること、できることをどう使うか）」、「情意・態度にかかわるもの（どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか）」の資質・能力を高め、「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質の育成を期す」ための学びである。

「主体的・対話的で深い学び」は、「問題発見・解決のプロセス」であり、「問題の発見」⇒「問題の定義、解決の方向性の決定」⇒「解決方法の探索、計画の立案」⇒「結果の予測、計画の実行」⇒「振り返り」の過程が示されている。そして、これには可逆的な「他者への働きかけ、他者との協働、外部との相互作用」が不断に展開されることも記されている。

今回提起された「主体的・対話的で深い学び」を見ると、東京学芸大学の「自主ゼミ」と多くの共通点があることに気づく。①学習者の主体的な意志にもとづく参加、②多様な参加者による対話的な学び、③そして深い学びによる課題の解決、という「自主ゼミの作法」は、「主体的・対話的で深い学び」の目指すところとかなり重複するのである。中央教育審議会や文科省などが、新学習指導要領で新たに示した意義や方向性は、すでに本学の「自主ゼミ」が先取りしていたといえるのである。「自主ゼミ」は、第二次大戦後、師範学校から大学になったものの、いまだ教育研究環境が不十分な状況下において、これを補うべく学生・教員の熱意によって開始され、本学の特徴・伝統文化として成長し、位置づいてきたが、その方向性は、新学習指導要領と共通するものであった。「自主ゼミ」の方向・方法の意義が、広く社会に認知されたともいえる。

そして、アンケートで見たように、今日「自主ゼミ」に主体的に参加している学生や院生の本学附属図書館に対する期待は大きい。そのさい、大学図書館界の議論も重要である。たとえば、平成 28 年（2016 年）6 月に仙台で開催された第 63 回国立大学図書館協会総会で採択された「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン 2020～」は、 3 つの重点領域「①知の共有－＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有」、「②知の創出－新たな知を紡ぐ＜場＞の提供」、「③新しい人材－知の共有・創出のための＜人材＞の構築」を、強化すべき図書館機能として提示している。また、本学図書館が会長館を務め、教員養成大学 11 大学からなる「国立教育系大学図書館協議会」では、情報化社会における教員養成大学附属図書館固有の課題・方向について議

論が深められている。

こうした状況をふまえ、本学附属図書館は、昨年 2017 年 11 月に新たな指針として「『Terakoya☆コモンズ』構想 – 『教え合い、学び合う』場は時代を超えて – 」のプランを発表した（p.23 参照）。現在、この構想をもとに、本図書館は「学びのにぎわい」の場になることを目指している（大石「Terakoya☆コモンズの挑戦 – 教え合い、学び合う – 」パンフレット『「Terakoya☆コモンズ」構想 – 「教え合い、学び合う」場は時代を超えて – 』*所収）。ここでは、前述の新学習指導要領の方向性をふまえつつ、「自主ゼミ」を含む学生コミュニティの活動環境の整備充実の必要性を指摘している。

(* http://library.u-gakugei.ac.jp/notice/Terakoya-commons20171116.pdf)

その具体策として、本学附属図書館では、昨年度、①図書館の活動やイベントなどのニュースをまとめた『図書館かわらばん』の発行（2018 年 3 月までに 7 号発行）、②2018 年 3 月に図書館 1 F カウンター左側の棚を利用した「自主ゼミ」情報・成果の展示コーナーの設置（p.22 参照）、③図書館キャラクターの公募（12～1 月）と選定（3 月）（p.24-25 参照）など、活性化・環境整備をはかってきた。新たな教育を担う教員養成大学附属図書館として、「自主ゼミ」を含む学生コミュニティの発展を支援・促進する機能と性格を強めるためにも、本学附属図書館の今後のさらなる充実・発展を期待したい。

東京学芸大学附属図書館外観

［追記］

本稿は、今年度定年を迎える私の「卒業論文」でもある。本文中でも述べたが、私自身、本学学生・院生時代、そして非常勤・常勤教員時代を通じてかかわってきた「自主ゼミ」については、いつも気にかかっていた。おりしも、平成 28 年（2016 年）4 月から平成 30 年（2018 年）3 月まで、私が附属図書館長在任中、これも本文冒頭で述べたように、附属図書館が、平成 29 年（2017 年）11 月 2 日から 30 日まで約１か月間、メールシステムを使ったアンケート調査「『自主ゼミ』等の授業外学習に関する調査」を実施した。この準備などにかかわったことをきっかけに、私なりに「自主ゼミ」の考察を試みることにした。大学内のさまざまな人たちに会い、資料を読み込んだ私なりの「主体的・対話的で深い学び」である。もちろん、本稿で、すべて解明できたわけではなく、残された課題も多い。しかし、「意義と実態」について、一定度の考察ができたということで、ひとまず報告することにした。

執筆にあたっては、アンケート作成・修正にかかわった情報リテラシー係主任眞崎光司をはじめとする東京学芸大学附属図書館職員諸氏、広報企画課副課長小坏弘貴、広報企画課メディアラボ特命講師加藤桂子、大学史資料室専門研究員小正展也、東京学芸大学学生自治会執行委員部、歴史学研究室・東京学芸大学史学会など諸氏・諸機関より協力を得た。また、成稿にあたっては学術情報課長綾部輝幸氏から多大の協力を得、発表にあたっては、川手圭一東京学芸大学附属図書館長、教育研究支援部長石橋英二氏のご配慮を得た。末筆ながら記して謝意を表する次第である。

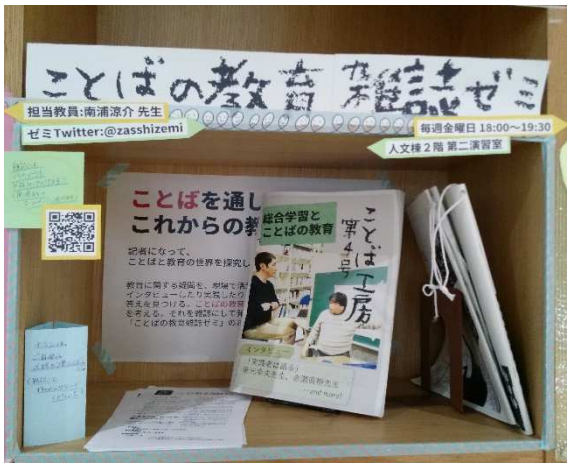
本稿が、今後の本学の「自主ゼミ」、そして附属図書館のさらなる発展・充実に寄与するところがあれば幸いである。

2018 年春学期の自主ゼミ紹介展示

希望する自主ゼミが紹介展示を行う場を、図書館 1 階新着図書棚に作った。

（一部を紹介する）

ASKA ゼミ



ことばの教育雑誌ゼミ

源氏ゼミ

児童文学ゼミ

国語理論×実践ゼミ

「Terakoya★コモンズ」構想 発表！

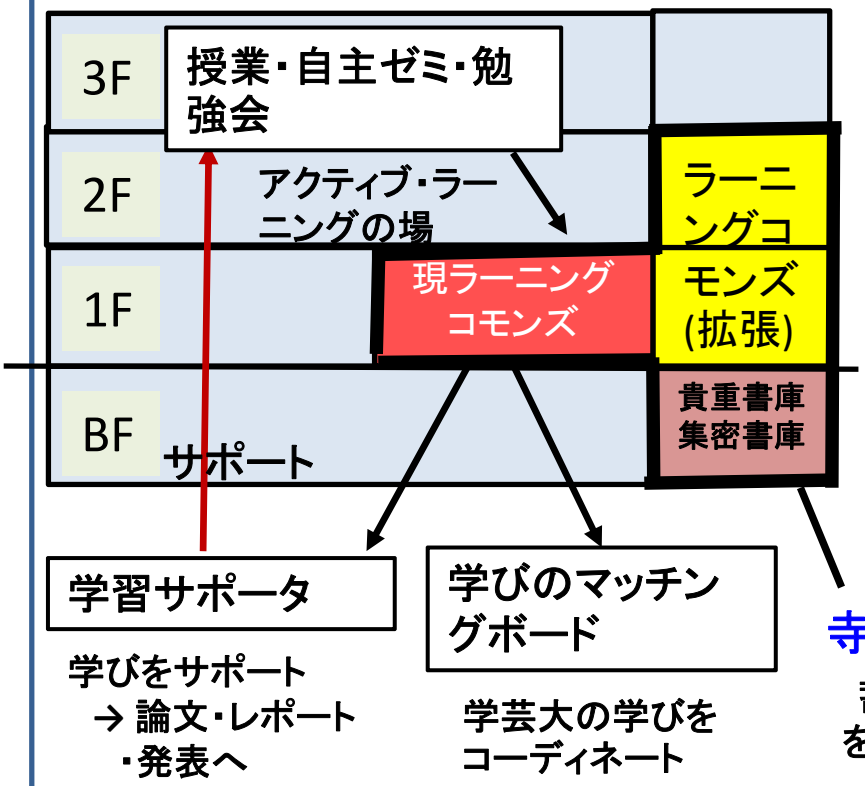
館内・Webでパンフレットを配布中！

附属図書館は、ラーニングコモンズが活発に利用され館内のスペースが不足していることから、ラーニングコモンズや書庫の拡張を含む「Terakoya ☆コモンズ」を構想し、実現を目指しています。

このたび、パンフレット〝「Terakoya☆コモンズ」構想　－「教え合い、学び合う」場は時代を超えて－〟を作成し、館内・Webで配付を開始しました。ぜひご一読の上、実現に向け投書箱や回答フォームにご意見をくださいますようお願いします。　（現在、国に要求を続けている事業です。）

パンフレット

Terakoya★コモンズ～教え合い、学び合う



Terakoya☆コモンズ

現代の寺子屋

自主的な学び
集団の学び
多様な学び

⇩

ラーニングコモンズ

「教え合い、学び合う」

現職教員・市民・教育関係者への開放「学びのにぎわい」

図書館キャラクターの決定

図書館キャラクターの公募（2017年12月7日～2018年1月22日）に、本学の学生・職員６名から６点の応募があり、3月16日、本学学術情報委員会の下に設けられた図書館キャラクター審査委員会が開かれた。附属図書館の「Terakoya☆コモンズ」構想にある「教え合い、学び合い」や「学びのにぎわい」を形にした図書館キャラクター、という観点で審査を行ない、最優秀作品（採用作品）１点・優秀作品１点を決定した（次ページ参照）。

○最優秀作品（図書館キャラクターに採用）
「まなぶんぶん」橋本絢加さん（A類美術科３年[応募時]）作

学芸大という豊かな森の中の図書館で、花の蜜を集める代わりに本から情報や知識を集め、仲間と教え合いや学び合いを行うミツバチ、というコンセプト。
おしりの針は鉛筆になっており、仲間に何か教えたいときや、何かを書くことによって学習するときに役立ちます。

○優秀作品
「ブックロー博士、ライ、ブラリ」近藤薫さん（学務課職員）作

図書館のことに精通している「ブックロー博士」と学生の「ライ」、「ブラリ」。
「森の物知り博士」「森の哲学者」として親しまれているフクロウ。大学の知の象徴である図書館のシンボルにふさわしいと考え、キャラクターデザインしました。

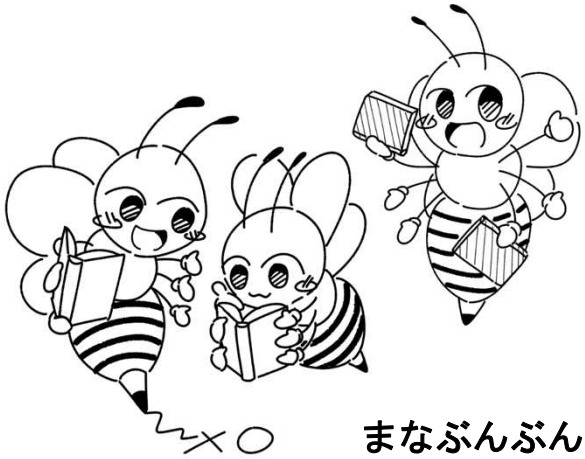
大石　学 審査委員長（附属図書館長※）**の言葉**　　（※2018年3月31日まで在任）

「審査委員会では、７名の委員が厳正な審査・投票をおこないました。６作品いずれもが力作でしたが、とくに上記２作品が高い評価を受けました。投票は１位２点、２位１点の方法で集計し、わずか１点差で「まなぶんぶん」に決まりました。古くから知性・学問のシンボルとして知られるフクロウと、集団でアクティブなイメージのハチとの接戦、そしてハチの首位獲得は、静かな知の蓄積の場から、活動的な知の創出の場へ、という図書館の大きな変化を象徴しています。新しいキャラクターのもと、図書館に集う皆さん一人一人が大きく成長するとともに、本学図書館が「教え合い、学び合う」「学びのにぎわい」の場として、さらに発展することを願ってやみません。」

図書館キャラクター表彰式

最優秀作品に「まなぶんぶん」

3月、図書館キャラクターが決定しました。昨年12月～1月に本学学生・教職員に公募した作品の中から、橋本絢加さん (A類美術科3年[応募時]) の「まなぶんぶん」が最優秀作品に選ばれました。図書館とラーニングコモンズの「教え合い、学び合い」、「学びのにぎわい」を現すキャラクターとして、今後の活躍が期待されます。惜しくも次点、優秀作品となった近藤 薫さん(学務課職員)の「ブックロー博士、ライ、ブラリ」とともに館長表彰を行うこととなりました。



まなぶんぶん

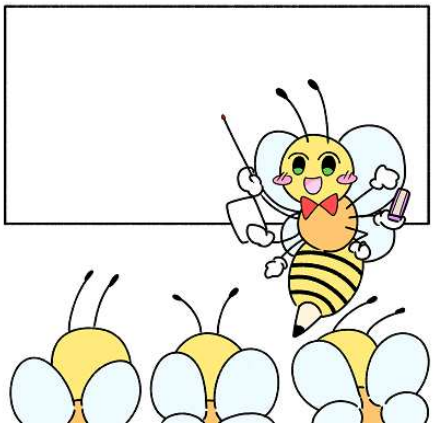
ブックロー博士、
ライ（左）、ブラリ（右）

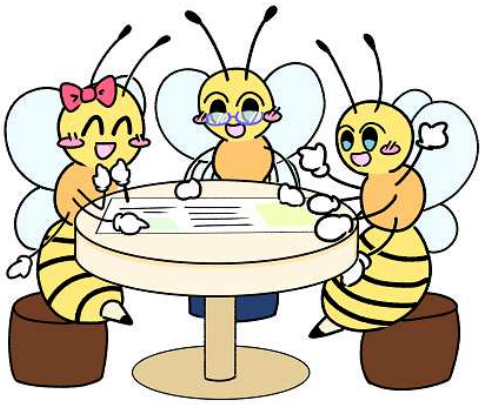
川手館長から表彰状を授与

4月27日(金)昼休み、ラーニングコモンズで表彰式が行われ、川手附属図書館長から受賞のお二人に表彰状が授与されました。会場には審査委員を務めた教職員、受賞者のご友人など10数名が集まり、和やかな雰囲気でした。橋本さんは感激した面持ちで、「まなぶんぶん」はひらめいてさらっと描けたこと、美術棟の近くにハチが多いのもアイディアのもとになったこと、図書館のキャラクターとして親しまれるイラストをこれから描いていきたいことなどを話してくださいました。

橋本さんへ表彰状授与

近藤さん（左）・橋本さん（右）





図書館かわらばん特別号（2018 年夏）

東京学芸大学「自主ゼミ」の意義と実態

―附属図書館「自主ゼミ等」アンケート調査によせて―

大石　学（本学教授(歴史学分野)／前・附属図書館長）

2018 年 8 月 31 日発行

東京学芸大学附属図書館